

機関番号：53203
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19720033
 研究課題名（和文） ロシア正教古儀式派における聖人画像研究—ヴィグ共同体のイコンを中心に
 研究課題名（英文） Study on the Iconography of Saints of Russian Old Believers’
 —Focus on the Icon Painting of the Vyg Community—
 研究代表者
 宮崎 衣澄（MIYAZAKI IZUMI）
 富山高等専門学校・国際ビジネス学科・准教授
 研究者番号：70369966

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、ヴィグ共同体をはじめとするロシア正教古儀式派の手によるテンペラ画のイコンをとりあげ、同じ聖人をモチーフに描いた正教会のイコンやフレスコ画等との比較分析を通じて、古儀式派のイコンの全体的な傾向と特性を明らかにすることであった。古儀式派のイコンの全体的な傾向としては、空間や写実性を否定するより伝統的な描写のほか、テーマによる好み、古儀式派教義の強調などの特徴がみられた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to compare icon paintings and frescoes of the same saints done by the Russian Orthodox Church, and in effect highlighting making the unique characteristics and features of the icon paintings by Russian Old Believers’. As a result, we found that the icons of the Old Believers’ remained more traditional in how they were drawn. For example, with regard to the icon paintings, Old Believers’ didn’t strictly adhere to realistic painting when it came to space and people. Also, they had favorite themes and emphasized Old Believers’ dogma in icon paintings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	480,000	2,880,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学（美術史）

キーワード：イコン、ロシア正教会、古儀式派

1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまでロシアでも未研究であったロシア正教古儀式派ヴィグ共同体の木彫イコンに着目し、国立歴史博物館をはじめとするロシアの美術館での独自調査に基づき、新たな画像分類の方法を提示した。さらにヴィグ共同体のイコン芸術全体の傾向を把握するため、木彫イコンのみならず銅製イ

コンやルポーク、テンペラ画のイコンなど素材を異にするイコンの調査を行い、制作年代や制作者、用途等における差異を明確化した。ヴィグ共同体のイコン研究を進める過程で、同共同体のテンペラ画のイコンは、“ポモーリエ派”として古儀式派のみならず正教会の間でも高い芸術性が認められ、比較的多くの研究者の注目を集めてきたにも関わらず、ほ

とんど研究が進んでいないことが明らかになった。その最大の理由は、共同体閉鎖時に国家正教会側によって多くのイコンが破壊・没収されたため、同共同体で制作されたとされるイコンの現存数が少ないことにある。加えて文献資料も限られており、その多くを3代目共同体長 И. フィリポフの歴史書などによる断片的な記述に依拠している。現代の古儀式派研究者である E. ユヒメンコは、「現在までドゥルジーニンの論文(1926年)が短くはあるものの“ポモーリエ式”イコンの芸術的な特徴をよく伝えた唯一の包括的な論文である」としている(Неизвестная Россия, М., 1994. С.32.)。そのドゥルジーニンによる記述は次のとおりである。「…初期にヴィグのイコン画家はソロヴェツキー修道院のスタイルを、次にストロガノフ派を手本とした。しかし、後にこれらの手本からはなれて、自らの画法で創作した。顔に非常に明るく白みがかかった色調をつけ…ソロヴェツキー修道院の黄色の背景を金色の背景にかえた…」(К истории крестьянского искусства XVII-XIX веков в Олонецкой губернии.// Известия академии наук СССР, М., 1926. С.1481-1482.) すなわちポモーリエ派独自の特徴として述べられているのは、白みがかかった顔の色と金色の背景のみである。近年プラトノフやチュグレエヴァによる研究が知られているものの、これらの研究は所属する美術館が所蔵する特定のイコンについての画像分析が中心であり、対象をポモーリエ派全体にすえた包括的な研究ではなかった。現存するイコンの点数が限られているため、ポモーリエ派のイコンのみを集めて比較するこれまでの研究方法では、その特徴を十分に明確化することは困難であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の通りである。

(1) ヴィグ共同体をはじめとするロシア正教古儀式派の手によるテンペラ画のイコンをとりあげ、同じ聖人をモチーフに描いた正教会のイコンや儀軌、写本装飾、フレスコ画等との比較分析を通じて、古儀式派イコンに共通する特徴を明確化する。

(2) 古儀式派イコンを拠点別に比較し、古儀式派イコンの中でヴィグ共同体のイコンがどのような特徴をもつのかを明らかにする。

3. 研究の方法

古儀式派イコン全体の特徴を明らかにするために、次の方法をとった。

(1) 同じ聖人をモチーフに描いた正教会のイコンやフレスコ画、写本挿絵と比較分析し、流派や時代による変化を明らかにすることで、古儀式派の画像上の特性を見出す。

本研究では、国家正教会と古儀式派の両方で崇敬された聖人である、マクシム・グレク(1470-1556)の画像を分析の対象とした。マクシム・グレクはギリシアの学者で、ロシア正教会の典礼書の修正事業に関わった人物であり、写本や伝記にも多くの画像が残されている。ニーコンの教会改革後は古儀式派信仰の理論的拠り所として古儀式派信徒の間で特に崇敬され、ヴィグ共同体のイコンや書物にもマクシムの画像が数多く見られる。

イコンは儀軌に基づいて描かれるため、本来には時代や制作地が変わっても同じ画像で描かれるはずであるが、現存するイコンをみると、モスクワ派やノヴゴロド派などの名前が示すように時代や場所によって同じ聖人でも画像が異なっている。そのため、古儀式派と正教会のイコンの差異を分析することにより、古儀式派信徒が聖人のどのような点に興味と崇敬の念を抱いていたかが明らかになる可能性が高いと考えられる。

(2) 古儀式派イコンの中でヴィグ共同体のイコンの特徴を明らかにするため、初めにヴィグ共同体のイコンに描かれた聖人マクシム・グレクの画像を、ヴィグ共同体の写本挿絵やルボークにおける描写と比較し、共通する特徴を明らかにする。その上で、時代や制作地が異なる古儀式派のイコンと比較・分析をし、ヴィグ共同体のイコンの特徴を浮き彫りにする。

4. 研究成果

(1) 正教会の画像との比較

現存するマクシムの画像は、時代や制作者によって様々なタイプがある。マクシムの没後もっとも早い時期に制作されたのは、写本の挿絵である。16-17世紀に書かれた写本のマクシム像は、胸より上の横向きの半身像である。頬と額の深いしわ、鷲鼻、長いひげ、東洋的な顔という共通の特徴がある。これは、マクシムの没後間もなく書かれたマクシム像であることから、実際のマクシムに近い肖像画であったと考えられている

(Беловрова. О.А. К вопросу об иконографии Максима грека// ТОДЛР. Т.15. С.303.) 17世紀になると写本の挿絵に加えて、単独でイコンやフレスコ画に描かれるようになった。モスクワのウスペンスキー聖堂(1684年)、ヤロスラヴリの先駆者イオアン教会(1694-95年)にはマクシムのフレスコ画がある。フレスコ画の画像では、没後すぐに描かれた写本の描写とは異なり、聖人としての威厳が強調されている。マクシムは正面向きの立像で、手には開いた本を持っている。マクシムの頭には後光が描かれていて、銘は《преподобный Максим Грек (修道聖人マクシム・グレク)》である。すなわちマクシムは正教会で列聖されるはるか前からすでに聖

人として描かれている。マクシムは2度も教会裁判にかけられたが、1589年のロシアの総主教座獲得と関連して、マクシムの名誉回復は非常に早く、すでに17世紀後期には聖人の地位にまで高められていたことを示している。このフレスコ画のマクシム像は、18世紀以降に古儀式派がさかんに制作した立像のタイプのマクシム・グレクのアイコンにおける特徴と共通する部分が多い。手にしている付属物が本か数珠か、左手か両手かというバリエーションはあるものの、円筒形の修道士帽、円形に広がった長い髭、どっしりとした重量感のある体格などの点で類似している。そのため17世紀の国家正教会によるフレスコ画が、その後の立像のタイプのマクシム像の基礎となったと考えられる。

古儀式派のアイコンと国家教会のフレスコ画を比較すると、古儀式派のアイコンはマクシムが手に持っている本に2本指の十字に関する内容が書かれていること、修道士の服に強調するように赤色の八端の十字架が描かれていること、マクシムの髭がさらに大きく強調されて肩をおおいつくすほどに広がっていることが違いとしてあげられる。特にヴィグ共同体のアイコンでは、マクシムの髭は頭の5-6倍の大きさまで広がっている。上述した差異は正教会と古儀式派の教義の違いである。したがって、古儀式派はマクシムを古儀式派教義の正当性を証明する人物としてみなし、古儀式派の教義を強調してアイコンに描いていたと考えられる。

マクシム像は立像のほかに坐像のタイプも多く現存している。特に古儀式派では、坐像で机の上に本を広げているマクシムのアイコンが18世紀以降大量に作られた。坐像のマクシム像の初期の例は、シイスクのアイコン儀軌(17世紀初期)、17世紀の写本挿絵(科学アカデミー図書館、アルハンゲリスクコレクション、No. 1044)等にみられる。マクシムは横向きの全身像で椅子に腰かけ、足置き台に足を置いている。ひざの上に紙を置き、ペンで何かを書いている。耳をかくすタイプの帽子をかぶり、顔の特徴は最初期のマクシム像と同様で肖像画の特徴を残している。聖人というよりは、修道学者としての立場で描かれている。机の上にはペン立てや紙を切るナイフ、インク瓶などの筆記用具が置かれている。

このアイコン儀軌と18世紀以降の古儀式派のアイコンを比較すると、古儀式派のマクシムは髭がより強調されて横に広がり、体格も重量感があり、まっすぐ正面を見据えて聖人としての威厳が強調されている。古儀式派のアイコンではひざの上でなく、机の上に本を広げて観者にみせている。本の記述内容は様々である。古儀式派の主張する3回のハレルヤに関する文章(宗教史博物館所蔵)、また沈水

の洗礼について書かれているものが多く現存している(歴史博物館シーリンコレクション、歴史博物館モロゾフコレクションほか)。またマクシムの修道頭巾に八端の十字架が書き込まれている例もある(歴史博物館シューキンコレクション、エルミターージュ美術館ムスチョーラ派のアイコン等)。

正教会のフレスコ画やアイコン儀軌と古儀式派のアイコンを比較してきた結果、古儀式派のアイコンでは、立像、坐像のいずれのタイプのマクシム像も、髭や八端の十字架など古儀式派の教義に関する部分が強調されていること、マクシムが聖人としての威厳が強調して描かれている、という特徴が明らかになった。これに対して国家正教会では、フレスコ画や写本挿絵にはマクシム像がしばしばみられるものの、17世紀以前のアイコンやアイコン儀軌には、単独のマクシム像はあまり見られず、ラドネシュの聖人の一人として描かれている。18-19世紀には単独のマクシムの素描やアイコンが比較的多く現存していて、これらのアイコンや素描には古儀式派の手によると考えられる明確な特徴はないため、国家教会のアイコン画家による作品とも考えられる。この時期のマクシムの図像をみると、全体的に髭が大きく広がって描かれていて、体格も重量感にあふれ、聖人としての威厳に満ちている(Маркерov, Г.В. Святыe древней Руси. СПб. 1998. С. 484ほか)。このことから、18世紀以降にマクシム像は初期の肖像のタイプから次第に離れていき、髭が大きく広がったマクシムの図像が一般化していった。この変化の過程には、古儀式派が大量に描いたマクシムの図像が影響を及ぼしたと推察される。

(2) 古儀式派のアイコンの中でのヴィグ共同体のアイコンの特徴

ヴィグ共同体の中でのマクシム・グレク像の特徴を分析するために、はじめに同共同体で制作された、手書きのルボークや写本挿絵などを調査したところ、アイコン以外のマクシム像はあまり多くないことが分かった。したがって本研究ではアイコンのみを分析対象とした。ヴィグ共同体で制作されたとされているマクシムのアイコンは、歴史博物館所蔵のアイコンと、トレチャコフ美術館コーリンコレクションのアイコンの2点である。いずれも立像で一見すると別のアイコンと識別できないほどよく類似している。マクシムは腰までの立像で、左手には開いた本を持っている。本の内容はおおよそ次の通りである。「3つのあわせた指は三位一体を表していて、伸ばした二本の指はキリストの二つの位格(人性と神性)を表している」2本指の十字についての内容である。両方のアイコンとも、文字の上下に大きさを揃えるためのガイドラインが記されていて、文字も非常に入念で丁寧な描かれている。右手は二本指の十字の形をしてお

り、左手に持った本の内容を体現している。右手の手首には古儀式派の黒い数珠を下げている。頭には黒い修道帽をかぶり、目は左の方向を見据えている。顔には深く皺が刻み込まれていて、長老のような威厳を感じさせる。大きく強調されるように広がった髭は肩幅以上に広がって、胸のあたりまで伸びている。髭の毛の流れ一本一本も丁寧に描かれている。マクシムは茶色の下着の上に赤色の上着、その上に深い青色のマントを着ていて、マントの中央の帯には赤色で八端の十字架が描かれている。マントのひだや影も丁寧に描写されている。マクシムの頭の上にアイコンの主題「修道聖人マクシム・グレクの像」が赤字で記されていて、この文字はポモーリエ派の筆致で描かれている。この2点のアイコンは、いずれも18世紀末から19世紀初頭、すなわちヴィグ共同体の末期に制作されたとされている。このヴィグ共同体のアイコンを、他の古儀式派のアイコンと比較すると、ヴィグのアイコンは芸術性と技術の高さにおいて際立っている。聖人の顔の描写はもちろんのこと、衣服や本などの付属物、銘、アイコンの枠の縁取りまで丁寧に描かれている。他の古儀式派拠点のアイコンでは、開いた本の中で文字が誤って書かれている例も見受けられ、教義に精通している者がかいたのではなく、他のアイコンから写すときに間違えたと思われる。

そのほか、ヴィグ共同体のアイコンは、他の古儀式派のアイコンと比較して、マクシムの顔の特徴が、肖像画のタイプである写本挿絵のマクシム像に近い。細い顔に深く刻まれた皺、東洋的な顔立ちという特徴をよく表している。ヴィグ共同体の図書館は、マクシム・グレクの写本を所蔵していたことから、アイコン画家が肖像画に近い写本装飾に描かれたマクシム像を参考にして描いた可能性が考えられる。全体的な構図の面では、ヴィグ共同体のマクシム像は、ヤロスラヴリの先駆者イオアン教会フレスコ画と類似している。立像で左手に開いた本を持っていることや右手で本を指示していること、修道帽の形態や修道衣の上にマントを着ていることも同じであり、ヴィグのアイコン画家が国家教会のフレスコ画を知っていた可能性が考えられる。

これらのことから、ヴィグ共同体のアイコンの特徴として、①アイコン制作の高い技術と緻密な描写、②古儀式派教義とマクシム・グレクの事績への精通、③正教会のアイコンやフレスコ画、写本装飾の熟知、の3点が挙げられる。

その他、ロシア美術館が所蔵する18世紀中期とされる立像のマクシム・グレクのアイコンがある。このアイコンもポモーリエ派とされているが、先に分析したヴィグ共同体のアイコンとは少し異なる特徴をもっている。ロシア美術館のアイコンも同じく腰までの立像で正

面を向いているが、左手に本ではなく数珠をもち、右手は祝福を受けるジェスチャーをしている。頭にはお椀型の修道帽子をかぶり、白髪で髭も白く特に歳をとってからのマクシム像である。上述したヴィグ共同体のアイコンとの違いとして注目すべき点は、手や顔のより写実的な描写方法である。特に手は立体感や質感を感じさせるより方法で描かれていて、歴史博物館やコーリンコレクションのアイコンとの大きな差異となっている。古儀式派はアイコンに西欧画風の写実的な描写方法を取り入れることに強く反対しており、ヴィグ共同体のアイコンには特に人物像における写実的な表現は見られない。そのためロシア美術館所蔵のマクシム像は、ポモーリエ派のアイコンの中でも特別な位置を占めており、このアイコンの制作地や流派に関しては再度検討を深めていく必要があると思われる。

マクシム・グレクを描いた古儀式派のアイコンは多数現存しているが、今回の調査ではどの古儀式派拠点で制作されたか特定できないものも多くあった。今後さらに多くのテーマを描いたアイコンも蒐集し、比較・分析することによって、拠点ごとの特徴が明らかにされると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

宮崎衣澄 「西田美術館所蔵アイコン《大天使ミハイルと聖ゲオルギー》に関する一考察」、ロシア語ロシア文学研究第41号、2009年、53-62頁 査読有

[図書] (計2件)

①И.Миязаки Сызранская икона «Святой Архангел Михаил и святой Георгий Победоносец» в собрании музея Нисиды (Япония) // Старообрядчество в России. (XVII-XX вв.) Вып. 4. Москва. 2010. С.611-617.

②宮崎衣澄 「古儀式派の信仰に生きる人びと—モスクワでのインタビューから—」、『ロシア 祈りの大地』、大阪大学出版会、2008年、147-165頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮崎 衣澄 (MIYAZAKI IZUMI)

富山高等専門学校・国際ビジネス学科・准教授

研究者番号：70369966

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

